

新
今
昔
物
語

新
今
昔
物
語

菊
池
寛

著者 菊池寛 版元 芝書店 東京都港區芝田村町貳丁目拾
五番地 印刷者 小野通久 印刷所 文壽堂工場 橫濱市中
區簗澤貳拾九番地 裝幀者 青山二郎 昭和貳拾參年七月貳
拾日初版印刷 昭和貳拾參年七月貳拾五月初版發賣

菊池 寛著 新今昔物語



金壹百五拾圓

日本出版配給株式會社

目

次

六宮姫君

馬上の美人

心形問答

三人法師

龍

伊勢

大雀天皇

1

29

49

71

99

117

129

學者夫婦

狐を斬る

辨財天の使

偷盜傳

奉行と人相學

好色成道

あとがき

145

161

189

205

221

249

270

六
宮
姬
君

今は昔、六の宮と言ふ處に、宮腹の子に兵部の大輔と云ふ人が住んでゐた。

宮腹の子と言ふのは、皇族の女性を母に持つてゐると言ふことである。それは内親王、もしくは皇族の姫君の子であると言ふことを意味するが、然し時めいてゐると云ふことにはならない。

藤原氏の全盛時代だつたから、皇族であると言ふことが權勢を意味してゐなかつたら、宮腹と言ふことも、系圖の尊貴を示してゐても、榮華を示してゐなかつた。この話の主人公のやうに、むしろ後世の貧乏公卿と言ふやうな意味にさへとれるのである。

兵部大輔と言つても、それは一度兵部大輔を勤めたと言ふことで、現職ではな

い。兵部大輔の位は、正五位下である。殿上人には違ひないが、最下位である。現職を離れてゐては、五節の式會などに、參内するだけである。

現職に在る間は、衣食を賜ふが、それを離れると、たゞ位田だけで生活する外はない。位田と言ふのは位についてゐる田地である。正五位は、わづかに十二町である。

しかも遠國の越前に在つたから、途中の運送難で、年に五六十俵の米しか届いて來ない。しかも、折々は途中で、盜賊に掠はれて、一俵も届かない年さへある。

屋敷は、父祖以來住んでゐるもので、宏大なものであつたが、二十年來何の修繕もしないから、寢殿など破損してしまつて、雨洩れが幾個所も出來て、使用に堪へなくなつてゐる。

泉殿や、西の對も寢殿同様にあれてゐる。東の對だけは、何うやら手を加へて、こゝに全家族が住んでゐる。主人の兵部大輔と北の方と娘一人と、その外は乳母と

女中が二人と下男が三人である。二、三年前までは、牛車もあつたが、車が破損して以來は、牛飼の童だけが下男として仕へてゐる。主人や、北の方が外出する時は近所に住んでゐる親戚の家から、一時車を借用する始末である。主人は、かうした窮境を脱しようとして、四、五年前までは、年々除目の行はれる前は、いろ／＼運動してゐた。

除目と云ふのは、一年の初に行はれる官吏の大更迭である。一度だけは、どんな遠國でもいい、から國司になりたいと思つてゐたが、はかばかしい友人もない彼を、推薦してくれる人は、誰もなかつた。年々の除目にもれてゐる裡には、到頭あきらめてしまつた。

かうなつて來ると、希望は、たゞ娘一人にかゝつてゐた。北の方は、染殿の後の孫娘に當つてゐた。染殿の后きさきと言ふは、關口良房の娘であつたが、本朝一と言はれるほどの美しい方であつた。

一年、物の氣に煩はせられて、あらゆる御祈り修法をとり行はせられたが、露の驗しるしもないので、大和國葛城山の頂きに住んで居る貴き聖人を、宣旨を以て御前に召して、加持をさせたところ、その驗しるしあらた著かにして、忽ち御惱が癒えた。が、その時后のお姿をかい間見た聖人が、道德堅固の身でありながら、あまりに端正美麗のおんに、心が迷ひ氣が碎けて、深く愛慾の心を起し、現世では思ひのまゝにならないために、自ら食事を絶つて死して、惡鬼となり、后を惱まし奉つたと云ふ傳説がある后である。多分、これが歌舞伎でやる「鳴神上人」の原話であらう。

かうした血筋を引いて居られたから、十五になられた春には、白木蓮の蕾のやうな、得ならぬ氣高い美しさを持つて居られた。父、兵部大輔も母、北の方も、掌の玉と鐘愛されて、起きては母君が片時も傍を離れず、夜は父母の間に寝せて、めめいつくしむ事、限りがなかつた。

殊に、母君は娘が女御更衣に召されても、また關白や大臣などの公達が通つて來

られても、恥しくないやうにと、女一通の學文や諸藝を、心をこめて教へてゐた。

男の子を持たぬ兵部大輔夫妻の希望は、この娘が然るべき公達と、情縁を結ぶと云ふことが、たゞ一つの希望であつた。またどんな公達が通つて來られても、この娘なら、おろそかに思はれる筈はないと言ふ、心の誇りを持つてゐた。

然し、何分にも貧乏なので、權門勢家の人々との交際など、思ひも及ばなかつたし、また姫自身として、四季折々の晴着などあるわけではない。物語遊山などに、一度も出て行つたこともないから、然るべき公達の眼にふれる機會など、さら／＼あるわけではない。

その上、姫についてゐる乳母が、苦心して相手を探さうと云ふ熱意も才覺もなかつたから、姫はまるで、深山の花、深海の底の白玉のやうに、人の眼にふれないで十五、十六、十七と、あたゝ花の盛りを過されてしまつたのである。

姫が、十八の春を迎へられた正月に、父、兵部大輔は、ふと風邪が因ではかなく

世を去つてしまつた。すると、まるで良人の跡を追ふやうに、母、北の方が、その年の五月の初に、これもそれほど重い病氣だと思はれなかつたのに、日に／＼衰へて行つて、つひにはなくなつてしまつた。

世にたゞ一人、取り残された姫君の悲しみは、限りもないものであつた。感情的にも致命的な痛手であつたが、それに劣らない生活上の痛手が伴つた。主人が死んで、男子の後繼がないと、位田が半分になつてしまふのである。その上、女手では遠國への督促なども、はかばかしは出来ないで、年々送つて来る供米が、いよいよ心細くなつてしまふのである。しばらくの間、數多くあつた道具などを、賣つて暮してゐたが、それもだん／＼残り少くなつた。消極的であつた乳母も、今はいろいろ知り人の間をかけ廻つて、姫のために、頼みになるやうな相手を探す外はなかつた。

姫が十九になつた秋の初である。漸く候補者が、一人見つかつた。それは、乳

母の兄弟である僧の仲介である。それは、越前の前の國司の長男である。廿二、三歳であるが、形も美しく、心ばえも直しい方で、通つて來られても、決して恥かしい方ではない。又、その父君が、今は非役であるが、元來參議の次男であるから、來年の除目に、必ず國司として相當の大國に赴任されるに違ひないと云ふのである。參議と云へば宰相とも云はれる大納言中納言に即ぐ太政官の官吏で、位も三位以上で、いはゆる公卿もしくは上達と云はれる。

しかし、深窓に育つて、慎しい内氣な姫は、かう云ふ話にも、乘氣にはならなかつた。男を持つことが、生活のためだと思ふと、たゞ悲しいだけであつた。乳母から、この話を持ち出されたときも、肩にかかる黒髪を亂して、さめ／＼泣き伏してしまつたのである。

もちろん乳母に對して、はか／＼しい返事などするわけはなかつた。

乳母が、どんな返事を先方へ與へたか分らないが、相手の男からは、その後いく

度も玉章や歌などが届けられた。乳母が、姫に見せても、返事など書かうともしないので、乳母は一人残つてゐる召使の姫より二つ年上の女が、手など割合よく書くので、それに云ひふくめて、代筆をさせた。さうした手紙のやりとりも、男を動かしたと見え、男からの贈り物として、車一輛にいろ／＼な財寶がとゞけられた。米も十俵ばかりあつたし、絹も麻も十反宛位あつた。後世の結納である。

乳母や召使達は、幾年目かに、春が廻つて來たやうによろこんだ。

當時のかうした男女の交渉は、妻になるのか妾になるか、甚だハッキリしない。私通に近いものである。結婚式と云ふやうなものは、ないのである。男の家へ女を迎へるのではなくて、女の家へ男が、通ひ始めるのである。尤も、その男が一家の主人になつた場合は、北の方として女を迎へられるのである。かつて、アメリカでリンゼイと云ふ判事が提唱した友愛結婚——試験結婚と云ふものに似てゐる。だから、もちろん男の方で、倦きてしまつて、だん／＼足が遠くなる場合もあるのであ

る。だから、一人の男性で、幾人もの女に通つてゐる場合もある。だから、日本武尊は、東征の途中尾張で、宮津姫を寵幸遊ばされたが、相模の海を渡るときは弟橘姫を伴はせられたと云ふことになつてゐる。武將源義朝、蒲には範頼の母が、尾張には頼朝の母がゐたし、美濃では青墓の長者の娘がゐたし、都には常盤御前がゐた。どの女も、妻でもなければ妾でもない。又、妻でもあり妾でもあると云つてよい。その中で、家柄の血正しい女が生んだ子が嫡子である。

話は餘事に亘つたが、とにかく車一輛の贈り物をしてから、通ひ始めると云ふのは、當時にあつては、ちゃんとした手續を踏んだ方で、（春の夜の夢ばかりなる手枕）のやうな無責任な求愛ではないのである。

が、姫は初て、男に相見えることの恥かしさや、怖しさばかり先に立つて、さうした贈り物を見て、たゞ、けうとげに、眉を曇らせてゐる丈である。

乳母は、一家の事情を説き、姫が婚期を過ぎて居り、もう二十の聲を聞いたたら、